

鬼ノ城のつくり

土塁や石垣でつくられた城壁が、山頂近くを鉢巻状に取り囲んでいます。その長さは全周約2.8km、囲まれた城内面積は約30.6haあります。城壁の東西南北4か所には城門をひらき、また雨水を城外へ排水するための水門が6か所設けられています。

城内の中心部には礎石建物7棟が確認されるほか、東部には鍛冶工房が営まれたことも分かってきました。



「屏風折れの石垣」：城壁を外に突出させ、高い石垣を築いています。見張り台などの施設でしょう。



礎石建物：米などを貯蔵した倉庫。



角楼：城の背後を守る施設と考えられます。（復元）



西門と土塁：発掘調査の成果をもとに復元されたもの。



水門：雨水で城壁が壊れないように、城外へ排水する施設。



〈お問い合わせ〉 岡山県古代吉備文化財センター 〒701-0136 岡山市北区西花尻 1325-3
 電話 086-293-3211 FAX 086-293-0142
 ホームページ <http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm>

甦る！古代吉備の国

謎の鬼ノ城 城内調査大公開 vol.IX

平成21年12月1日（火）～7日（月） 岡山県古代吉備文化財センター

ようこそ！鬼ノ城へ

岡山県古代吉備文化財センターでは、「甦る！古代吉備の国～謎の鬼ノ城」調査事業を平成18（2006）年度から行っています。この発掘調査の成果を知り、岡山県が誇る歴史と文化を再発見していただくため、調査現場を公開いたします。

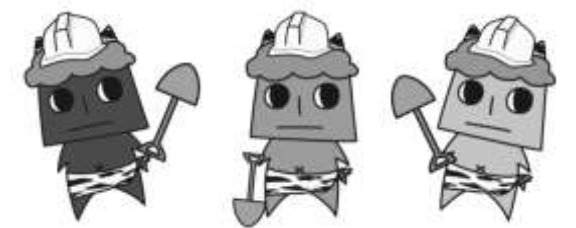
鬼ノ城ってなに？

鬼ノ城は、今からおよそ1,300年前につくられた城です。吉備高原の南端、標高約400mの鬼城山山頂に位置しています。

西暦663年、朝鮮半島で滅ぼされた百済を救援するため、日本は援軍を送りますが、唐と新羅の連合軍と戦い、負けてしまいます（白村江の戦い）。その後、唐・新羅の連合軍が日本にまで攻めてくることを恐れた日本の朝廷は、西日本の各地に城をつくらせました。鬼ノ城は、そのような古代山城のひとつと考えられていますが、記録が残っていないため、はっきりしたことは分かっていません。



▲復元された鬼ノ城西門



これまでの調査

調査年	調査主体	おもな成果
昭和53（1978）	鬼ノ城学術調査団	全体の規模、構造などが明らかになる。
平成6（1994）～	総社市教育委員会	城門・水門・角楼などの様子が明らかになる。
平成11（1999）	岡山県古代吉備文化財センター	礎石建物や鍛冶工房の跡が明らかになる。
平成18（2006）～	岡山県古代吉備文化財センター	多量の土器の出土。大形建物の様子が明らかになる。

今年度の調査

今年度は、城内の東部3か所で、鉄を加工して鉄製品をつくったと考えられる鍛冶工房跡の発掘調査を行っています。鉄を加熱した鍛冶炉跡などが発見されており、鍛冶工房群の様子がだいに明らかになってきました。



※この資料の引用・転載はご遠慮ください。

調査速報 発見！鍛冶工房群

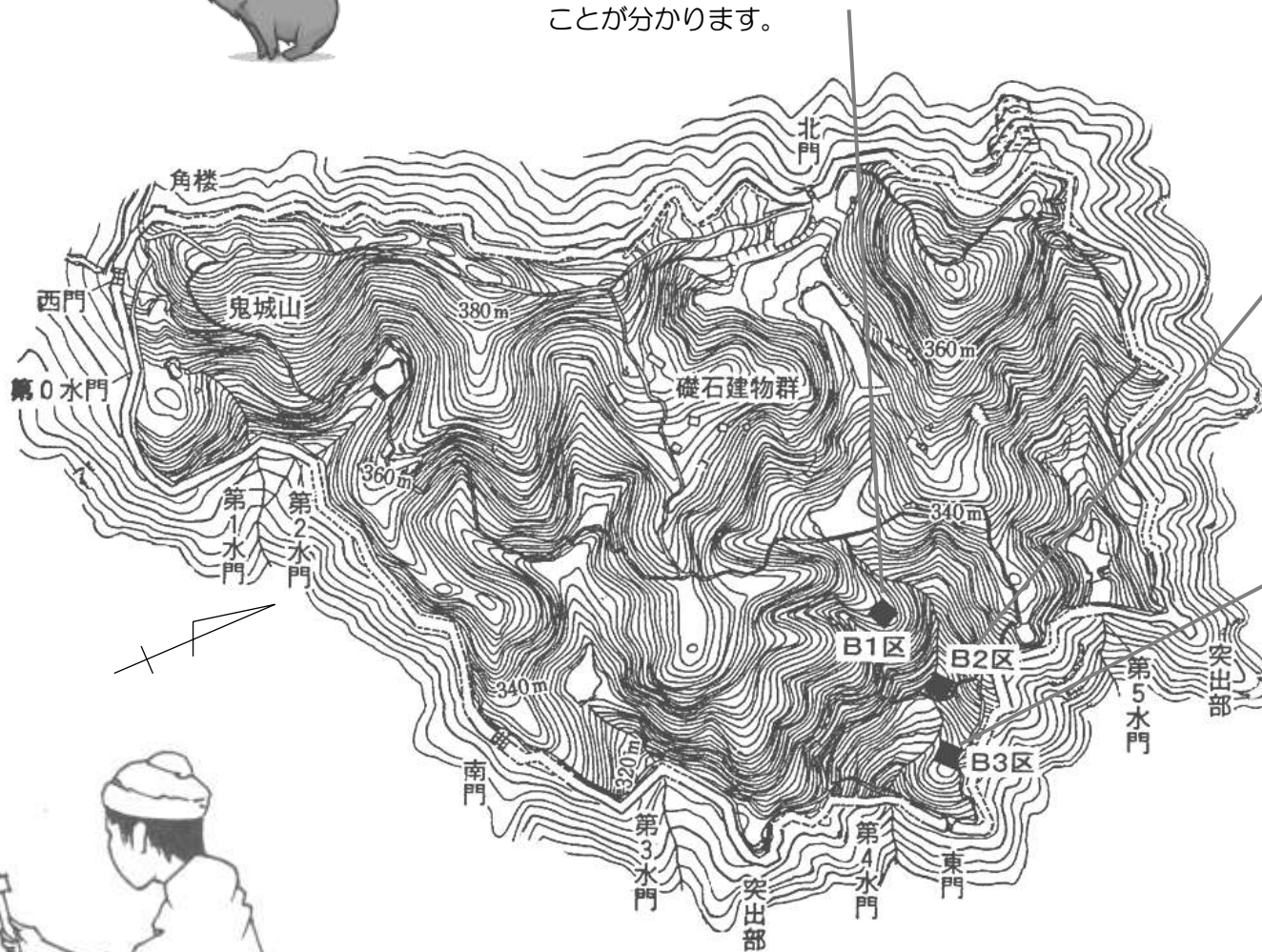
これまでの調査で、鍛冶炉や鉄滓、鍛冶炉に空気を送る吹子の羽口などが発見されており、鬼ノ城の城内東部に鍛冶工房群が存在したことが分かってきました。

古代山城は、日本国内に約30か所ありますが、城内に鍛冶工房を備えていることが分かっているのは鬼ノ城だけです。その工房の様子が明らかになってきたことは大きな発見といえます。



吹子の羽口

「吹子」とは、鍛冶炉の火力を上げるため炉内に空気を送る送風装置(木などでできているため残っていない)。「羽口」はその先端に付けられた土製(焼きもの)の送風口です。



鉄滓

鍛冶作業を行った時にできる、鉄の不純物のかたまりで、鍛冶炉の周辺に大量に捨てられています。



B1区の調査

7月から9月にかけて調査しました。前回の大会で見ていただいた場所です。

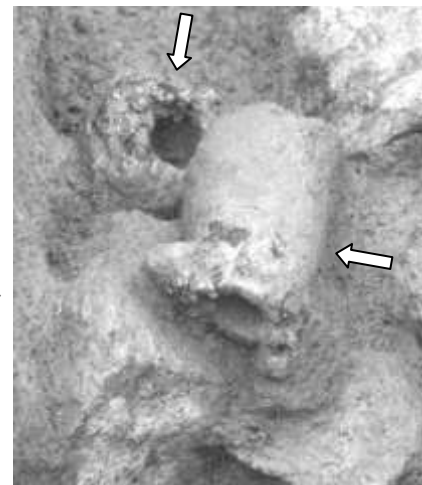
ここでは鍛冶炉の痕跡を1か所確認し、鉄滓、吹子の羽口、土器などが出土しました。鉄滓の出土量(約300点)からみて、調査した3か所の中では最も小規模な工房であったと考えられます。

出土した土器は、およそ7世紀後半ごろの年代を示しており、ちょうど鬼ノ城がつけられたころの鍛冶工房であることが分かります。

B2区の調査

10月に調査しました。

ここでは鍛冶炉を2か所確認し、鉄滓、吹子の羽口が大量に出土しました。その出土量からみて、B1区よりも大きな工房だったようです。わずかに出土した土器は、やはり7世紀ごろの年代を示しています。



吹子の羽口が多数捨てられた状態で見つかりました。



白い札は鉄滓の出土位置を示しています。およそ1,000点出土しました。

B3区の調査

11月から調査に着手し、現在調査中です。

まだ詳細が明らかになっていませんが、ここでは竪穴住居のような穴を掘って、その中で鍛冶作業を行っていたようです。

遺物として、鉄滓や吹子の羽口、砥石などが出土しています。砥石は、つくった鉄製品に刃を付けるなどの仕上げに使われたものでしょう。

何をつくった？

鉄は貴重品であり、捨てられることなく再利用されることが多かったため、この鍛冶工房でつくられたとみられる鉄製品は出土していません。そのため、どんな鉄製品をここでつくったのかは、想像に頼るしかありません。

最も考えやすいのは、鬼ノ城の築城に必要な道具で、鋸・鋤などの土木工具や斧・鋸・鑿などの大工道具、釘などの建築材などが考えられます。またこのような道具の修繕も行っていただいでしょう。

さらに想像をふくらませると、来るべき戦いに備えて、鉄鍬(やじり)などの武器も製作していたかも知れません。